

2010 年秋季からみられる藻（海草）場の衰退について

香川県水産試験場 主任研究員 藤原宗弘

2010 年度のノリ漁期から「ノリの養殖施設にかかるガラモ（ホンダワラ類）やアマモが少ない！」、との声をかなり頻繁に聞くようになりました。その理由について考察を行いました。

香川県のガラモ場、アマモ場面積の推移を図 1 に示します。近年若干の増加傾向にありますが、昭和年代と比較すると低位横ばいで推移しています。それがまた 2010 年頃から目に見えて減少してきています。なぜでしょうか？一部では「磯焼け」「ウニ焼け」との声も上がっています。しかし、磯焼けであればかなり広範囲にわたって、その症状がみられますし、ウニ焼けだとその場所に高密度にウニ類が分布（写真 1）しています。

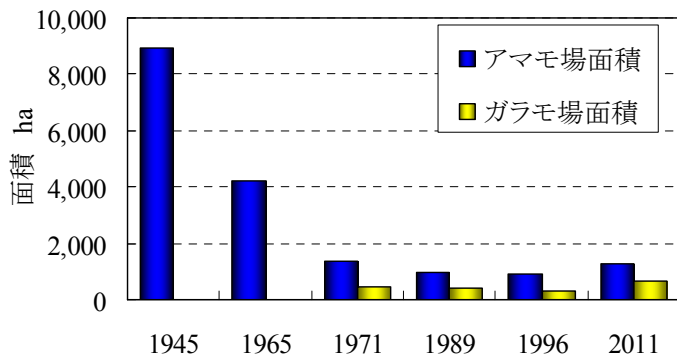


図 1 各種藻場面積の推移(香川県)

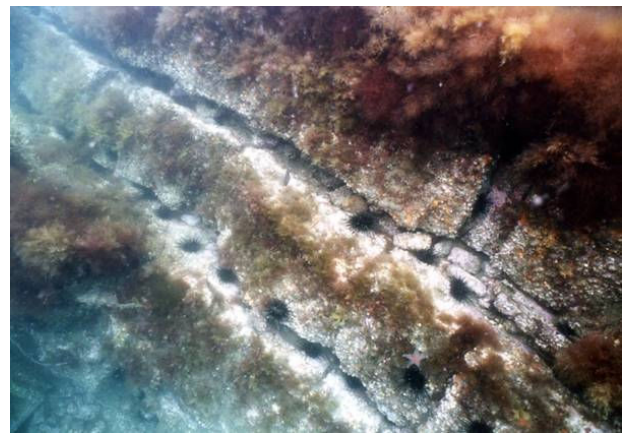


写真 1 ウニ焼け(1997 年豊浜町沖の磯)

特に 2010 年度、2011 年度のノリ養殖時期にノリ養殖の施設に流れ着くアマモ、ガラモが極端に少なく、海面を漂う「流れ藻」もほとんど見られない状況でした。その原因のひとつとして考えられるのがアイゴ(写真 2)です。アイゴは、スズキ目アイゴ科アイゴ属のうさぎ顔の毒魚で、英名はその顔から Rabbit fish と呼ばれます。しかし、背びれ、腹びれ、尻びれに毒の棘を持つ魚として有名です。アイゴは食用価値も高く、刺身、塩焼き、から揚げもおいしく、「アイゴの皿ねぶり」という言葉があるように、煮付けがあまりに旨いので、つい皿までねぶって(舐めて)しまうという話もあります。独特のアンモニア臭に似た臭気もありますが、鮮度の良いアイゴの内臓は渦巻きのように収まっており、「ぜんまい」「ののじ」とも言われ、焼いて食べると美味しいそうで、香川県東部では好んで食べられています。このアイゴは海藻を餌に釣りの対象にもなり、草食性魚類として全国的にも有名です。



写真 2 アイゴ(2010 年 10 月、建て網調査)

1996 年度から香川県水産試験場が行っているアマモ生育状況調査（さぬき市津田）では、アイゴの食害被害は、1998 年秋と 2007 年秋に観察されました。その時はアマモがバリカンで刈られたように地下茎から 10cm 程度残してきれいに食べられていました（写真 3）。

その時に漁獲されたアイゴの胃内容物調査では、アマモは確認できませんでしたが、紅藻類が確認されました。

このような状況が 2010 年度秋季に県内のか なり広範囲で観察されました。特に備讃瀬戸海域を中心に直島・女木島（写真 4）、庵治地先のアマモ場で確認され、庵治地先のガラモ増殖礁では、アカモクの新芽が主軸を残してきれいに食べられてしまいました（写真 5）。また潜水調査中も与島、小手島、女木島のガラモ増殖礁付近で多くのアイゴ（幼魚：手の平サイズ）の群れが観察されました（写真 6）。この状況は 2011 年度秋季にもみられ、特に直島では広大な天然アマモ場、造成アマモ場が消滅してしまっている場所も確認されています。



写真3 アマモの食害(2007年10月、津田)



写真4 アマモ食害痕(2010年10月女木島・直島)



写真5 アカモク食害痕(2010年10月庵治)



写真6 アイゴの群れ(2010年10月 小手島ガラモ増殖礁付近)

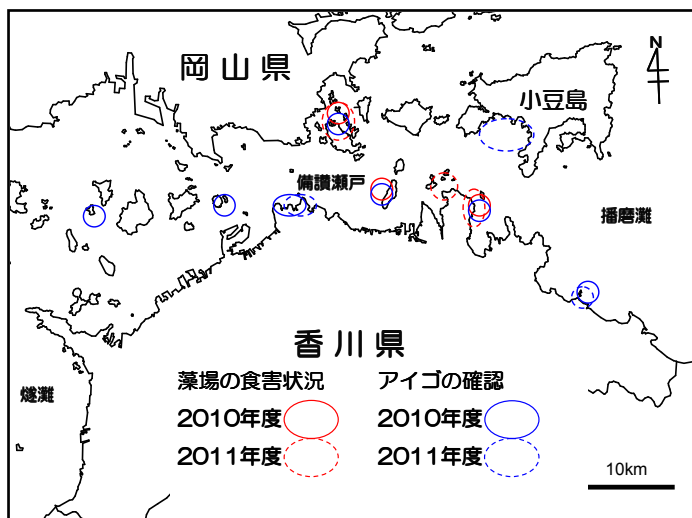


図2 食害被害およびアイゴの確認状況

2010年度は特に与島から直島、庵治地先の備讃瀬戸海域を中心に、2011年度はやや東寄りの小豆島、直島海域から東讃地域にかけて、多くのアイゴが確認されました（図2）。また、2011年秋季は徳島県、広島県でも同様のガラモ・クロメ・アマモ場への食害事例の連絡があり、アイゴは瀬戸内海の各地、かなり広範囲で活動していたようです。

そのアイゴが2010年以降かなり多く漁獲されるようになりました（図3）。2011年のアイゴの月別地区別漁獲量の推移（図4）をみると、特に東讃海域、小豆島南部海域での漁獲量が増加しています。高松中央卸売り市場での漁獲物調査でも、平成23年10月から11月にかけて、小豆島からのアイゴの出荷量が例年に比べてはるかに多く、多いときは180箱/日あったとの話と合致します（写真7）。

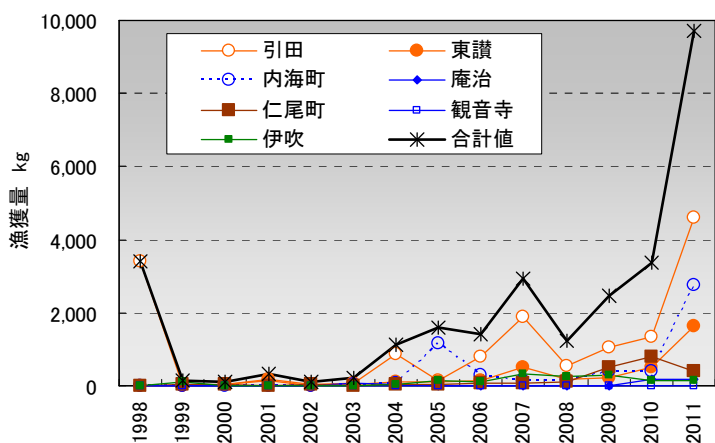


図3 アイゴ漁獲量の推移
(1998-2011TAC データ)

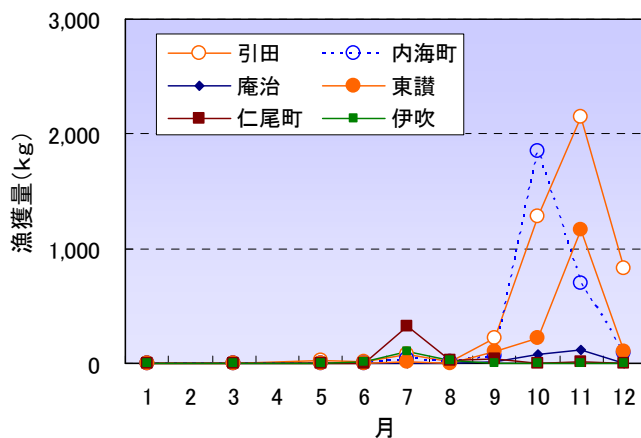


図4 アイゴ漁獲量の月別推移
(2011年 TAC データ)



写真7 高松中央卸売市場調査でのアイゴ
(平成23年11月10日)

このようにアイゴを含めた草食性魚類の急激な増加が、藻場衰退の要因のひとつとして十分に考えることができます。とくにガラモは、秋季のまだ若い新芽の幼体時に食害にあったことが想定され、冬から春にかけて生長・成熟する個体が少なくなれば、当然幼胚の供給量も減少していきます。重要な役割を担っている流れ藻の減少も認められており、このような過剰な摂食行動が複数年継続すれば、今後の藻場の推移を含めた生物生産の維持にも不安を感じるどころです。近年問題になっている養殖ノリの魚類（クロダイ、グレ、マダイ等）による食害も同様に、害をなす魚類の有効活用等も視野に入れた対策を早急にとる必要があると考えています。何か情報があれば水産試験場までよろしくお願ひします。